山岳写真家・穂苅貞雄
その生涯と昭和の山岳写真家たち

関次和子
東京都写真美術館　学芸員

山岳写真家・穂苅貞雄
その生涯と昭和の山岳写真家たち

関次和子

はじめに

穂苅貞雄は山小屋経営者で山岳写真家である父・穂苅三寿雄（1891-1966）と母・一重の長男として1921（大正10）年10月11日、長野県松本市に生まれた。父・三寿雄が槍ヶ岳に営業小屋を開設して、100年目にあたる2017（平成29）年、それを記念し、長男・貞雄のモノクロームの写真で構成する写真集『天空の槍ヶ岳　穂苅貞雄』の発刊が計画され、筆者は貞雄作品を調査する機会を得た。

北アルプスの中でも、最も鋭角的な岩峰で、ひときわ高く、そして天を衝くような雄雄しさで屹立する槍ヶ岳は、その姿ゆえ多くの登山家たちを魅了し、穂苅貞雄を含む幾多の写真家たちの創作の舞台となった山である。約2万カットに近いモノクロの4×5及び中判フィルム、それらを整理してコンタクトプリントを貼付した大量のアルバム類を調査し、ごく一部ではあるが、60年以上にわたり槍ヶ岳と対峙してきた穂苅貞雄の一途なまなざしがうかがえる作品群を同書で紹介することができた。

ここで貞雄の父・三寿雄について触れたいと思う。三寿雄は1891（明治24）年、松本市で菓子店を営む家の長男として生まれた。小学校を卒業する頃、三寿雄は竹細工製造を営む伯父の嘉七郎の養子となるが、新しい家庭や家業になじめず、将来に不安を感じた彼は16歳の頃、家出を決意。家人が不在になった隙を見計らって家を飛び出したが、捜索願が出され、塩尻峠あたりの宿で警察に保護された。

三寿雄は、山で遊ぶことが好きな少年時代を送った。北アルプス山麓の町・松本に生まれ育ったということもあるが、実の両親の元を離れ、孤独な少年時代を過ごしたことも山に恋い焦がれるきっかけになったと自らも語っている。三寿雄は小学校を卒業した頃から「東山」と呼ばれていた美ヶ原高原一帯を、友人らと歩き回るのを楽しみにしていた。美ヶ原高原から西の彼方に聳え立つ北アルプス連峰に思いを馳せ、いつかはあの山々に登りたいという憧れを抱き続け、1907（明治40）年、16歳のときに初めて上高地に足を踏み入れた。徳本峠から眺めた穂高岳の偉容に驚嘆し、上高地の静寂に感動し、そのときの経験が三寿雄の人生と山を強く結びつけ、山小屋経営という生活と山岳写真に取り組む出発点になったのである。

図1
涸沢の窓辺で

大正初期、山小屋の必要性と登山奨励の機運の高まりを確信した三寿雄は、大正６年に槍沢ババ平に北アルプスでは２番目の営業小屋となる「アルプス旅館」（大正８年に「槍沢小屋」に改称）を建設、翌年から本格開業した。この小屋の登場は、それまで岩小屋などで風雨をしのいでいた登山者にとっては大きな福音となり、以来今日まで長きにわたり、山を愛する人々の交流の場所になったのである。三寿雄は山小屋経営、山岳写真家としての活動と並行し、江戸時代末期に槍ヶ岳を開山した僧・播隆に関する研究も行い、晩年には短歌をたしなむなど、「山」をテーマにマルチな才能を発揮した人物でもある。貞雄は三寿雄の遺志を受け継ぎ、父の写真作品を後世に伝えるとともに、未完であった播隆研究を完結させた。東京都写真美術館では、2014（平成 26）年、「黒部と槍　冠松次郎と穂苅三寿雄」展を開催し、大正から昭和にかけて穂苅三寿雄が撮影した北アルプス・槍ヶ岳を中心とした代表作 65 点を紹介した。

幼年時代

「山」を総合芸術の場として生きてきた父の傍らで、貞雄も小学校低学年の頃から槍ヶ岳につれて行かれ、夏休みの大半を大槍小屋で過ごしていた。初めて槍ヶ岳に登頂したのは貞雄がまだ小学２年生のときである。以来、貞雄と槍ヶ岳とのつきあいは 90 年近くになる。大槍小屋は父・三寿雄と燕の小屋（燕山荘）の創業者・赤沼千尋が共同で 1921（大正 10）年に建設したが、完成した冬に雪崩で倒壊してしまい、翌年に残材をつかって規模を縮小して再建、戦前まで営業していた山小屋である。小学校時代の貞雄は山では小屋番らを相手に、町では近所の友人らと日が暮れるまで遊んでいた。新学期まであと２日を残した夏休みのある日、山から下りてきた小学５年生の貞雄はいつものように友人らと戦争ごっこをして遊んでいた。捕虜役の貞雄は縄で縛られ、助け役の友人が来るのを待っていた。友人が小刀でその縄を切ろうとしたときに手元を誤り、貞雄の右目をついてしまった。

「突然目の前が真っ白くなって、何かが破裂した感覚があった。つぎの瞬間、そのまま後ろに倒れこんでしまった」

ケガの知らせを受け、三寿雄は貞雄を松本町内の眼科に運び込み、治療を受けさせた。治療を終えた医師が父に告げた内容は、小学５年生の貞雄とって残酷な現実であった。

「残念ですが、息子さんは失明です。これは首を切ったのと同じくらいで、手当のしようがありません」

右目を失明するというハンディキャップがその後の貞雄の人生に大きな影響を与えたのは想像にかたくない。われわれ人間は空間的に三次元の世界を意識するため、二つの目をもっている。単眼でも奥行きの知覚を得ることはできるが、両目で見ることと比較して単眼では得られる立体感が乏しくなる。そのため風景を立体的に関知するには決定的なハンディになるのである。そのことは貞雄の心に大きな影を落としていくことになる。

写真とのかかわり

貞雄が写真に触れるのは幼少の頃にさかのぼる。父の三寿雄は、山小屋経営の資金に充てるため、副業として土産用の山岳写真や絵はがきを松本の土産店や上高地の旅館などへ卸していた。当時は写真印刷の精度が粗く、再現性に劣っていたため、密着プリントが絵はがきの代用を務め、土産品としても重用された。1931（昭和 6）年、貞雄が小学 4 年生のとき、父・三寿雄は竹細工業を廃業し、「ホカリ写真館」を開業する。専任の写真職人も雇い、土産用の観光写真だけではなく、スタジオポートレイト撮影まで幅広くこなした。カメラ機材が一般に普及していなかった時代、夏の登山シーズンには、カメラを山に持ち込み、槍ヶ岳を背景に記念写真を撮るサービスもした。

当時、松本市内には営業写真館が数件あったが、貞雄は実家の写真館を「普通の写真館のショーウィンドーと違っていて、変わっていた」と述べていた。ショーウィンドーに向かって右には人物写真、左には全紙サイズの山岳写真を飾り、毎年 2 月になると、多いときで 5 ～ 6 人の職人たちがやってきて朝から写真の焼き付けを行い、子供だった貞雄もプリントの水洗や、水洗後に新聞紙をひき、その上に印画紙をのせ、乾燥させる作業を手伝わされるのであった。

中学生になると、松本駅前の土産物店に山岳写真や記念写真の売り上げをときどき集金に行かされた。中には手数料を要求したり、支払いを渋る契約先もいて中学生の貞雄を困らせた。「ホカリ写真館」は、三寿雄が東京の知人を頼って写真材料を調達することができたため、ほかの写真館が材料不足で休業していた戦時中も営業を続け、客が途切れることはなかった。戦局が悪化すると農村から多くの青年たちが兵隊として戦地に送り込まれ、出征前の写真撮影の依頼が増えてきたが、中には撮影代のもちあわせがない客もいた。そのような客からは代金のかわりに米や野菜を受け取り、出征してゆく青年らの肖像を残していった。

青年時代

長野県松本第二中学校（現・長野県松本県ヶ丘高等学校）を卒業した貞雄は、1941（昭和 16）年に慶應義塾大学予科に進学した。その際、三寿雄は息子の大学の保証人として、かねてから山仲間であった塚本閤治（つかもとこうじ）（1896-1965）に頼んだ。塚本は大正・昭和初期の山岳写真、山岳映像の先駆者で、目黒区・油面（あぶらめん）に茶室を備えた豪邸に住み、銀座に 5 階建のビルを所有し、貞雄も父と何度か訪れた思い出がある。そのビルには山と溪谷社が入っていた。塚本の映画は日比谷公会堂や軍人会館（のちの九段会館。2011 年の東日本大震災により廃業）などで上映され、いずれも盛況で好評を博し、学生の貞雄もたびたび塚本の上映会の手伝いをさせられた。

日本が英米に宣戦布告し、太平洋戦争が勃発した 2 年後、貞雄は在学中の 1943（昭和 18）年に兵力不足を補うために学徒動員として召集された。子供時代の事故が原因で右目の視力を完全に失った

貞雄であったが、兵役は免除されず、幹部候補生に採用された。激しい訓練が行われ、夜間演習にも参加し、遠近感がさらに落ちる夜間は足下がおぼつかなくなる。演習時、いつもそばにいて目が不自由な貞雄の手を引いてくれた戦友がいた。その戦友の名は、芦部信喜（あしべのぶよし）（1923-1999）。日本を代表する法学者で、東京帝国大学法学部時代に学徒動員され、戦後は母校で教鞭をとり、文化功労者となった人物である。

図 2　槍ヶ岳の稜線に雲がわき、遙か上空までのぼっていく

父の山小屋を継ぐ

金沢で終戦を迎え、復学した貞雄は大学卒業後、東京の貿易会社に勤務した。父は右目が不自由な貞雄を写真館の跡継ぎとして期待せずに、夏の繁忙期の山小屋で手伝いができるように、夏休みの長い教員か勤め人になることを勧めていた。戦争が終結すると、人々は戦後の物資不足を苦にもせず、再び山に向かうようになり、自由な登山活動を謳歌し始めた。1948（昭和 23）年には日本山岳会信濃支部が中心となって、「山の絵画展覧会」を松本市公民館で開催した。戦時中、大都市から多くの画家たちが戦火を逃れるため、松本に疎開してきており、彼らと交流が深かった三寿雄が中心となって石井柏亭（はくてい）、安井曾太郎、足立源一郎ら当代一流の画家たちに山岳絵画の出品を依頼した。結婚したばかりで当時東京に住んでいた貞雄は、妻と二人で都内の画家たちの家を訪ねて作品借用に奔走した。中でも、槍ヶ岳を主題にした秀作を数多く描いた足立源一郎とは交流が深く、穂苅三寿雄、貞雄二代にわたり足立の創作活動を支えた。

北アルプスの中でも特に人気の高い槍ヶ岳をめざして、大勢の登山客が三寿雄の山小屋に押し寄せた。そのため、1952（昭和 27）年には収容力を高めるため 75 坪の肩の小屋本館を増築し、対応に努めたが、すでに 60 歳を過ぎ、心臓病を患っていた三寿雄の体力は限界に達していた。1954（昭和 29）年、周りの人々の勧めで長男の貞雄に経営を譲った。貞雄が山小屋経営のノウハウを得るために三寿雄とともに山小屋で過ごしたのは最初の年のみで、三寿雄はそれ

以降槍ヶ岳に登頂することはなかった。山小屋経営を引き継いだ貞雄は、登山客のみならず戦時中の空白期を埋めるために精力的な活動を再開した写真家や映像作家、画家など、山を主題にした多くの表現者らと出会うことになる。

写真との出会い

「父から写真の手ほどきを受けたことは一度もなかった」

これはインタビューの中でたびたび貞雄が発していた言葉である。父は地元の新聞や鉄道局の宣伝用ポスターに写真が採用されるなど、貞雄が物心ついたときからすでにプロ写真家として活躍していた。この言葉は右目が不自由なため、写真家としての技量を父から期待されなかったことに対する一種の反発だったのかもしれない。しかし、いつしか時を経て父のように山で暮らし、その自然をよく知るようになった貞雄は、父とは異なるアプローチで自らの表現を獲得していく。その才能を開花させたものこそ、父から受け継いだ山小屋経営を通じて得られた多くの人々との交流であった。

日本で登山と山岳写真が一般大衆の手に渡るのは、三寿雄が活躍していた時代、つまり大正末から昭和のはじめと重なる。一部の富裕層のみが実践していた近代登山は山岳部の学生たちを中心に新しいスポーツの対象として広まり、着実な発展をみせた。その背景には鉄道網が全国に整備され、山に出掛けることが簡単になったこと、山案内人の組織化や登山道の整備、そして山小屋の増加が挙げられる。登山のレジャー化・スポーツ化は山岳愛好家層を生み出し、多くの山岳会、同好会の結成を促した。昭和のはじめには写真もガラス乾板からフィルムに移行し、機動性に優れた小型カメラの登場は山岳写真愛好家も同時に生み出したのである。カメラ雑誌の創刊からやや遅れて 1930（昭和 5）年には『山と溪谷』（山と溪谷社）、翌年には『山小屋』（朋文堂）などの山岳雑誌の創刊が続き、山岳・写真雑誌の口絵や月例コンテストはアマチュア写真家たちの発表の場となり、登山と写真の大衆化を促していった。1936（昭和 11）年 11 月に結成された「カメラ・ハイキング・クラブ」はその炬火（かがりび）ともいえる。参加したのは内田耕作（1908-1993）、船越好文（1909-2001）、風見武秀（1914-2003）らなどで、その 3 年後にはここから「東京山岳写真会」が生まれ、穂苅三寿雄、塚本閤治も創設会員として参加する。この会は、戦時中の休息期を経て戦後に再興され、今に続く「日本山岳写真協会」になっていくのである。

山岳写真協会の有力メンバーだった風見武秀は戦時中、海軍省の嘱託写真家としてニューギニアに赴任し、敗戦の翌年の 1946（昭和 21）年 6 月に帰国すると同時に、北アルプスを中心に登山を精力的に再開した。風見は三寿雄の作品の中に、たびたびモデルとしても登場している。山小屋経営を引き継いで間もない頃、貞雄に山岳写真を勧めたのは風見や内田といった当時の山岳写真界を牽引していた写真家たちだった。「撮影する条件に恵まれた場所にいるのに、写真を撮らないのはもったいないではないか」と。わざわざ東京から写真を撮りにやってくる彼らからすれば、山を生活の場にし

ている貞雄が山にカメラを向けないことが不思議に思えたのであろう。貞雄が山岳写真を撮り始めるのは自然のなりゆきであったが、同世代で貞雄と同じく山小屋の二代目を継いだ燕山荘の赤沼淳夫（1923-2018）の存在も大きかった。彼も山小屋経営の傍ら山岳写真に取り組み、カメラ雑誌を飾る秀作を多数発表していたのであった。営業写真館の家に育ち、写真家の父を見て育った貞雄は、写真への情熱や才能を開花させるのに多くの時間を要さなかった。写真を撮り始めて2年後には山と溪谷社のアルパインカレンダーに作品が選ばれ、『アサヒカメラ』の月例コンテストに入選するなど、早くから頭角を現してきた。

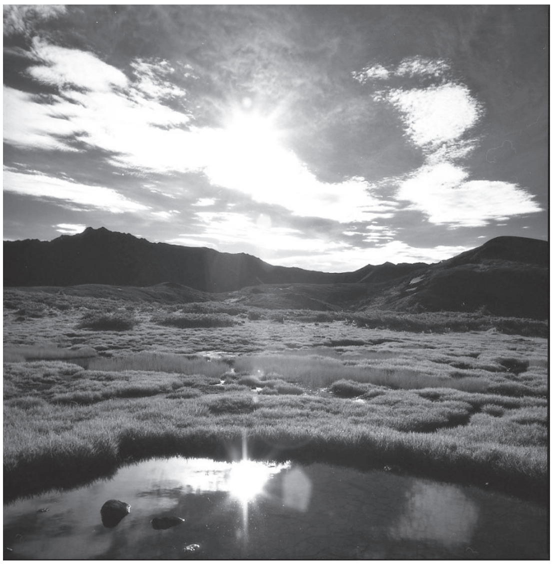

図3 雲ノ平の池塘に日が映える。遠くシルエットになった水晶岳を望む

写真家たちとの交流

貞雄に影響を与えた写真家の一人に田淵行男（1905-1989）が挙げられる。田淵は戦時中に長野県南安曇郡に疎開し、同年から高山蝶の生態研究・撮影に取り組み、1951（昭和26）年、『田淵行男山岳写真傑作集』（朝日新聞社）で衝撃的な作家デビューを果たした写真家である。田淵からは、望遠レンズをつけて被写体を狙う工夫など、写真の技術的なことだけではなく、幾度も撮影に同行し、田淵の写真への取り組みを間近で見る機会を得た。

「田淵さんは、とにかく粘り強かった」

田淵の被写体に対する強い意気込み、集中力は自分ではまねできないと貞雄は語る。田淵の作品、特に山岳写真では偶発性に頼らず、深い洞察力をもって山を見続け、明確な主体性を自らの制作に反映させること、それを主眼においた。千変万化する山の自然に惑わされない強さを備えた田淵の作品は、伝統的な山岳写真の系譜に位置しながらも独自の個性をもち、その粘り強い仕事や人物像は貞雄にも強い影響を与えたのではないだろうか。

貞雄がインタビューの中で多くの時間を費やして語っていたのは、同世代で後に家族ぐるみのつきあいとなった風景写真家の前田真三（1922-1998）である。二人の出会いは安曇野出身の写真家・映像作家の中沢義直（1922-2015）の紹介で安曇野撮影に同行したこと

であった。前田は復員後、東京の商社に勤める傍ら、趣味で渓谷や山岳写真など、自然風景を撮っていたが1965（昭和40）年、勤めていた商社を退社すると、フォト・エージェンシー「丹渓」を設立、フリーの写真家として活動を始め、以後風景写真の分野に新しい作風を確立した。1970年代以降、その活動の範囲は日本全国に広がり、長崎から北海道までの撮影旅行では3ヶ月間で2万キロを走破した。

自然風景を前にカメラを持つ人間は、当然のことであるが被写体の状況に全てを左右されてしまう。前田真三が「たとえ同じ場所であっても二度と同じ風景に出会うことは不可能である」と述べるように、一見、変化していないように見える風景でも、天候や光線の状態など、その風景を構成している条件は刻々と移り変わっている。

「前田は風景を切り取りに行くというか、ふつうの人なら見落としてしまうような風景の中にも、一番輝く風景を瞬時に写真にとらえていた。ふだん気にとめていなかった川面が冬になって凍ったとき、その模様を橋の上から見るととても絵になるとか。なるほど、と思った。前田はとにかく写真を撮るのが早かった。自分がもたもた撮影していると、撮り終わった前田は、『もう行くぞ』って車に戻っていく」

前田の手法は被写体とする自然がとらえやすい状態になるまで待つのではなく、積極的に追い求めて風景を発見するというものであった。貞雄は「前田との出会いによって、写真の目が広がった」と懐かしそうに振り返っていた。

図4 安曇野にて

作家活動を振り返って

貞雄は、自身の山岳写真家としてのキャリアは必ずしも順調ではなかったと語っている。山小屋経営と並行した撮影であるために様々な制約があり、撮影に専念できなかったこと。そして痛風に悩まされ、激痛のために歩くことすらままならないことが登山シーズン中に何回もあり、そのような状態が数年続いたことだった。運命だとあきらめていたが、たまたま痛風の名医と出会って、治療を受けるようになってからは再び山を歩けるようになり、貞雄は再び山

にカメラを向けるようになるのである。1985（昭和60）年には、槍ヶ岳山荘創立50周年を記念して、朝日新聞社からカラー写真による『私の槍が岳』を刊行。作家・近藤信行は同書の序文で「少年時代から槍が岳におのれを投影してきた貞雄氏の写真集からは、自然と人間との大いなる闘いがみられるとおもう。そしてその謙虚な人柄が写真集にいっそうの光彩をそえるだろう」と最大級の賛辞を贈っている。

槍ヶ岳直下の山荘にいることが多いため、槍への視線はついアングルが限定されがちである。そのため、貞雄は周囲の山々から様々な角度で槍をとらえるようになったという。数万カットにのぼるモノクロームのフィルムを丹念にながめていると、貞雄は撮影条件を慎重に吟味し、同じ場所であっても、移り変わる季節の中で流れる雲や光の変化を注意深く観察しながら、根気強く槍を見続けていたことがわかった。

「槍の鋭鋒はどこから望遠しても、空高く聳え、いつも私に闘志をかきたたせてくれるが、槍の神髄にふれたと思われる写真は残念ながらなかなか撮れない」

——穂苅貞雄著『私の槍が岳』1985年、朝日新聞社

貞雄のこの言葉は、長い時間をかけて槍ヶ岳と関わり続けることで築いた濃密な関係性ゆえに、その真の姿を見失っていないかということを常に自問しながらシャッターを切り続けてきたことの証左なのである。

【参考文献】
穂苅貞雄著『私の槍が岳』1985年、朝日新聞社
穂苅三寿雄著『山恋い』1998年、私家版
穂苅三寿雄著『槍ヶ岳黎明　私の大正登山紀行』2004年、山と溪谷社
菊地俊朗著『槍ヶ岳とともに　穂苅家三代と山荘物語』2012年、信濃毎日新聞社
『黒部と槍　冠松次郎と穂苅三寿雄』2014年、東京都写真美術館

※本稿は穂苅貞雄へのインタビュー（2017［平成29］年7月25日、8月15日）をもとに構成した。2017年11月、穂苅貞雄は96歳でモノクロの写真集『天空の槍ヶ岳』（山と溪谷社）を刊行し、同年12月12日にその生涯を終えた。